

〈研究ノート〉

# 諸 国 民 の 存 在

— R. ポランの政治哲学 三三 —

白 石 正 樹

## 目 次

はじめに

一 国民の概念

二 諸国民の歴史性

三 付随的考察

おわりに

## はじめに

われわれは一つの国民 (nation) の只中で生活しているし、またわれわれは諸国民に取り巻かれて生活している。それらの存在、それらの確実さは、われわれにとって議論の余地のない現実である、とレーモン・ポランは言う。それらは現代では、あらゆる政治的共同体の存在とその理解可能性への必要な諸原理をなし、また同じく、われわれが「国際的」(internationales) と称する諸関係、つまりいわゆる「諸国民の間の」平和と戦争の関係、の諸原理<sup>1)</sup>をなす。

ポランによれば、「諸国民」に関して、最初の問題はそれらを規定することにある。それは伝統的問題である。なぜなら、それは曖昧さなしには決して解決されないから。たしかに、一つの集合的表象、集合的意見、言い換えれば、諸々の意見、価値、規範、感情、確信、象徴の寄せ集めが問題であって、それは、それらの合着とそれらの転換により一つの客観的現実において、国民を、生きた自律的な現実、魂、人格にする傾向がある。そのような集合的意見は、ひとの知るように、民族的起源の共同体に、また同じく、歴史的伝統、慣習、文化、習俗の、そして同時に一つのコンセンサス、共通の政治的意欲の、共同体に依存している。共通の政治的意欲とは、対内的には共通の運命、共通の利益の感

情によって、対外的には自治、独立の意志によって、表現されるものである。一つの国民がおのずから作られるという観念は、たいそう情動性を帯びており、たいそう歴史的意欲を表象するので、それはしばしば神話において発展され、歴史における使命を負い、そして一つの運命として表わされる。

しかしながら、もしそうした諸々の性格の各々が重要であり、国民的自覚の形成において有効な役割を演じるように見えるとしても、それらの中のどれも十分なものではないし、またどれも必要なものではない。国民の本質と機能は、国民それ自体に関しても、それと人民 (peuple)、国家 (État)、祖国 (Patrie) との関連に関しても、議論の対象のままである。十八世紀以来、かかる議論はその表明、その存在、の一部をなしているようにすら思われる。<sup>2)</sup>

## 一 国民の観念

この同じ議論は、諸国民が、その語の近代的意味と同時に、二百数十年ほど前に現われたことを、われわれにあまりにも容易に忘れさせる。まず、フランス語の用法を考えよう。以前は、国民の語は哲学者たちの専門用語の一部をほとんどなしていない。「nations」によって、ひとは日常用法ではキリスト教徒と対比させて異教徒 (païens) を示していたし、また単数形の「nation」によって、同じ領土の住民たちの集会を示していた。しかし、その語はまだ感情的で個性的な負荷を受け取っていなかった。それはある何らかの領土に生まれた人々の総体、諸家族のある何らかの集まり、であった。例えば、パリ大学では、ひとは「nation」によって、ある何らかの地方からやって来た学生たちを示していた。こうして、ひとはフランス (イル・ド・フランス)、ピカルディ、フランドル、およびジェルマニ (ゲルマニア) について、すなわち有名なコレージュ (Collège) の四つの「学生団」(Nations) について語っていた。<sup>3)</sup>

また、古代人を思い起そう、とポランは言う。ひとが確認するように、ギリシア人は国民の観念を知らなかったし、明らかに、かれらは自らをバルバル (野蛮人) に対置したが、かれらは一国民を形成しなかった。ローマ人も同様だった。古代人の哲学は、都市国家 (État - Cité) または普遍国家 (État universel) について論じていたが、近代人の専有物である国民的国家 (État national)

について論じていなかった。封建的諸構造とキリスト教世界の観念の間にとらえられた中世の哲学者たちもまた、国民の観念を知らなかった。かれらはこの語の注目に値する用法を示していない。

十六世紀は、それにほとんどより敏感ではない。自分の選んだ君主にイタリアを救済するように勧めるときでさえ、マキアヴェリはイタリア人と蛮族について語っており、また彼はイタリアの人々の全体 (*università degli uomini d'Italia*) について語っている。われわれにとってすぐ近くにある国民の観念は、国民的自覚のなお遠い予測をなしており、またそれは、国民の近代的神話によってよりも、ローマの思い出によって靈感を与えられている。<sup>4)</sup>

フランスの法律家たちがフランス国民を思い起すときでさえ、かれらが考えているのは、その語の近代的意味でのフランス国民であるよりも、フランスの王が統治するところの国 (pays) である。国民の観念のあの前ぶれは、例えばルイ・セルヴァン (Louis Servin) では、ガリカニズムの形をして、かつ、本質的に王朝の争いであって国民的争いでない諸々の争いを通しての、教皇庁に対する王の世俗的権力の独立の主張において、現われている。おそらくすでに、マステローヌ氏 (M. Mastellone) が示唆するように、「国民感情の形成」が問題になっている。<sup>5)</sup> しかし、ひとはまだ遂行された結果からはるかに遠くにいる。

ジャン・ボダンに関しては、彼は自分の『国家論 [六編]』(*République*) を、国民を元にしてでなく、家族を元にして構成している。「国家は、幾つかの家族と、それらに共通するものの、主権的権力を伴う正しい支配である。」<sup>6)</sup> 国民的中间物は排除されている。

現代では、戦争と平和に関する研究は、ごく自然に「諸国民の間の戦争と平和」と題される。しかし十七世紀に、グロチウス自身はたんに『戦争と平和の法』(*Du jure belli ac pacis*) と書いた。その著作では国民の語はほとんど介在しないし、また、その観念は論議されていない。さらに、次のことに気づかないだろうか、とポランは言う。—— 法学の「万民法」(*jus gentium*) の観念は、多少とも自然法から独立していて、諸人民の間で義務づける力を獲得したものであるが、伝統的に奇妙な仕方<sup>7)</sup>で、「人々の法」(*droit des gens*) の形式で、翻訳されている。国民の観念が欠けていたし、人々 (gens) のそれがなおもその代りを占めていた。地上の諸人民 (peuples) の総体を、あるいは少なくとも、

それらの間のある重要な数を示すことが必要である。プーフェンドルフにおいても、まさしく同様である。彼の『自然法と万民法』(*De Jure naturae et gentium*)の中で、まったくグロチウスにおけると同様、人々(*gens*)の語が用いられないとき、彼のペンの下に現われるのは人民(*peuple*)の語である。しかしそのとき、主権とのその関係において法的に考察される政治体が問題になっている。すなわち、その結合が人間によって設定され、その諸部分の変化を通して永続的なままである、ある幾つかの数の家族から構成された政治体(*corpus politicum*)、道徳的団体(*corpus moral*)、が問題になっている。<sup>8)</sup>国民の近代的表象は、いまだ現れていない。

ホッブズに関しては、ひとは『ビヒモス』(*Behemoth*)の歴史的テキスト——そこではイギリス人、スコットランド人、およびドイツ人の友好または敵意の関係が思い起されている——のなか以外では、用いられた国民の語をほとんど見出さない。ここで問題になっていることに対応する近代の用語は、むしろ「国」(*pays*)の語であろう。<sup>9)</sup>言うまでもないことだが、諸個人、主権者、人民、市民たちの間にあって、ホッブズの教説においては、国民意識のための場所がない。「公的人格」(*personne publique*)が問題であるとしても、それはすっかり主権者の人格と混同されている。<sup>10)</sup>それはもっぱら法律的かつ政治的意味をもつ。それはまだ、近代的なナショナルの観念を伴う、あの感情的かつ神秘的な擬人化に差し向けない。

同様に、ロックにとって、国民の語は聖書的コンテキストの中でしか現れない。そしてそれは、バベルの塔の分散のときに「さまざまな家系」(*a diversity of families*)、「別個の家系」、を示すためであり、またはより先頃では、外国の住民たち(*populations*)、異なった「国々」(*pays*)、を思い起すためである。<sup>11)</sup>政治的共同体の形成は、そのとき国民意識の形成なしですませる。

十七世紀は、だから、哲学者たちの言語のなかで「国民」の観念が何らかの自覚、または近代的な専門的意味をとることなしに終る。その語の近代的意味での国民はまだ存在に達しないし、いずれにしろ、われわれが考察したように、その存在の特定の様式である、自覚的存在(*une existence consciente*)に達しない。<sup>12)</sup>

## 二 諸国民の歴史性

だから、こうした簡単な覚書から結論せねばならないことは、国民を規定する前であっても、その存在の問題を提起せねばならない、ということである。もし国民が諸政治的共同体の一つの不変の構造でないとすれば、その理由は、これが自然的でも必然的でもないからである。それは、ある何らかの文明の、それも、その発展の何らかの歴史的時期での、表現である。ポランによれば、国民は一つの自然的現実ではない、それは一つの政治的共同体が形成されるや否や、また発展するや否や、現れるのである。国民の概念は、あらゆる政治的共同体のなかに、自然的適用を見出すのではない。国民は歴史的現実、集合的歴史的表象であって、それは十八世紀頃に西欧文明において、またとくにフランスの哲学者たちを通して、しっかりした仕方で現われ、そしてそれは、その世紀の終りの革命運動とともに激しく発展する。<sup>13)</sup>

ポランに従えば、諸国民の歴史性の理論を元にして、ひとがそれをマルクスによって『共産党宣言』において主張されるのを見たような、国際的プロレタリアートによる国民の超出、および国家の衰退のテーマを再び見出す必要はない。マルクスにとって、政治現象である国民は一つの上部構造でしかないこと、そして、諸々の政治現象は、世界市場の経済的基礎にもとづく社会的実践のなかに吸収され、消滅するように求められること、を示すことが重要であった。<sup>14)</sup>ポランの目には、まったく反対に、諸国民の存在の歴史的 성격は、いかなる仕方でもその特定性を排除しないし、かつ、諸々の人間社会における政治的なものの還元しえない必然性は、諸国民の存在の歴史的 重要性から何物も取上げない。

ひとは諸国民の歴史性にとって可能な、多くの説明を思い起しうるのであろう。十八世紀まで、諸政治的共同体の人口統計学的規模は、国民的現象の形成に適合していない。— あるいは、都市はあまりに狭い枠組みを構成するし、あるいは、諸帝国はあまりに大きな枠組みを構成するので、諸々の国民的表象の一つの神話や神秘神学になるまで、強度に形成され集中されることはない。K. ドイツ氏 (M. K. Deutsch) が主張した情報の集中は、ふさわしい環境がないので、国民的自覚を引き起すために国民的象徴のまわりに発達し結晶化すること

ができない<sup>15)</sup>。諸々の政治的実体はそうしたものとして、長い伝統により国民意識の背景や基礎をなすほどの十分な連続性や十分な持続性をもって維持されていない。それらは、それらが支配する人民とごくわずかし結びつかず、そして王朝や自然的人格とあまりに結びついている。最も自覚的な政治的きずなは、個人的な諸関係の形をあまりにも保っている。共通の価値、規範、確信は、一文明のあまりに広い範囲に、または一都市のあまりに狭い範囲に属していて、一つの人民に、どうやら己の慣習や己の習俗から生まれた、国民的な共同体を自覚することを許さない。一般的仕方で、国家的諸制度が人民の生活に対してあまりに外面的であるところでは、またひとがそれらをとかく象徴的仕方で、超越的立法者によってもたらされ課されたものとして表すところでは、国家と国民との連結の機は熟していず、また、国民的首長を自任しうる首長たちの教育的活動に好都合な状況も熟していない<sup>16)</sup>。

それに反して、愛国的感情はしばしばそのふさわしい場所を得る。なぜなら、それは家族の主題に基づき、祖先、両親への愛着のうちに、またもしかしたら王朝の枠組みのうちに、発達するから。トゥキュディデスによってペリクレスに帰された、最初の戦死者のための追悼演説、ティトゥス・リヴィウスの諸物語、マキアヴェリの『君主論』第26章での響きわたる訴えは、諸国民感情の出現に先在する筋立て、それらがその上に発達する筋立て、として解釈されうる。まったく自然に十八世紀は、その父権的、家族的または王朝的含意の周りでしだいに拡大された、またはそうした含意から少しずつ解放された、祖国の主題を通して国民の存在を発見するだろう。ルソーがナショナリズムの最初の主題を提出するとき、彼はしばしば「祖国」への愛、「いいかえれば法律と自由への愛」、を介してそうするだろう<sup>17)</sup>。

反対に、歴史の所与の時期に、ますます強く世論に押しつけられるところの、また世論を近代の政治的理解の本質的カテゴリーにするとところの、諸表象の中に感じられる諸国民の現実の出現は、何に対応するのだろうか。

ともかく、空間においても歴史においても、政治的共同体によって、あるいはむしろ共存する複数の政治的共同体によって、価値、規範、感情、信念、慣習、生活様式の伝達と合一に好都合な規模が実現されるとき、あの拡散するコンセンサスが、自発的合和の、共通利益の、感情を生ぜしめる時期が到来した。

一つの共通の政治的意欲が発達して、己自身を自覚したのである。

それはポランによれば、少しモンテスキューが感じていたこと、そして彼が「国民精神」(l'esprit d'une nation) という公式のもとに記していたこと、である。しかし、それはまた、ルソーによって『不平等起源論』のなかで事実上の共同体として認められた、あの同じコンセンサス、あの同じ合一である。それをルソーは、『社会契約論』のなかでは逆の進め方によって、すなわち、政治的共同体を創設し主権者の生 (la vie du souverain)<sup>18)</sup> に参加するために、各個人の意志に訴えることによって表わそうとする。

こうした二重の運動から、国家に変化する国民の本質的性格たる、国民主権 (souveraineté nationale) の観念が生まれる。それはまず第一に、対内的主権 (Souveraineté interne) であって、それは国民の全体のなかに、その歴史の連続性と意味とのなかに、その使命のなかに、絶対的主権の正当化と原理とを求める。次に、対外的主権 (Souveraineté externe) は、最初に自治、国民的独立、の要求を表現しつつ、愛国的感情を強化して、それに攻撃的な様相を与える危険がある。国民的独立の主張は諸国民の間の競合と切り離せないし、また極限的には、それらの勢力間の紛争と切り離せないからである。国民意識はつねにナショナリズムを発散するおそれがある。

その時期にこそ、主権的国民は、それなしでは国家は抽象的制度にとどまるであろう、ほとんど人格的な性質を帯びる傾向がある。国民は、天分、性格、嗜好、および習俗を表明し、それらは国民が己自身であって他のものでないということを引き起す。——ひとがたんに一国家のメンバーでなく、ルソーが言うような、他の諸国民のそれと「相容れない」固有の習俗と慣例を与えられた国民国家のメンバーである場合にしか、真に人間にして市民でありえない、というほどまでに。

国民意識は、凝集 (団結) の自覚、習俗と諸意志の合一の自覚、一般意志におけるその表現、であると同時に、各個人の意志、同意、の主張である。こうして示されるのは、国民の観念の民主的本質、国民の形成と、いかなる程度それが援用されようとも、一つの体制 —— デモクラシー —— の出現との間の、密接な関係である。<sup>19)</sup>

ルソーによって示された、国民と「法律と自由への愛」<sup>20)</sup> との同化に至るまで、



国民とそれを縁取る体制とのあの密着を確認しないものはない。こうした同化は、同時に、自由主義と、国民の觀念の拡大を特徴づけるナショナリズムとの、衝突を予告するものである。—— ナショナリズムが自由の諸要求を吸収して、反自由主義的結果に帰着するほどまでにそれらを国民的独立の次元に移転するにしろ、国民的諸革命が諸個人の解放のために、また人間の普遍的諸権利のために戦うにしろ、そうである。国民的独立の戦争のために、また「諸人民の自決権」のために、枠組みは準備されている。

国民の己自身による自覚は、ポランによれば、あるときは、普遍的同意の主張により、またあるときは、ヘーゲルのように国民を「それ自身において発達した真の有機的全體性として」<sup>21)</sup>認めることにより、深くなるであろうし、正当化されるであろうし、高揚されるであろう。国民の只中で、自由と全體性との弁証法的働きがまだ続いている。

国民の主張、国家の正当化の主張、および国民によるその独立の主張といった主題の総体が、十九世紀を通して発達するであろうし、それは国民を、仕上がったあらゆる政治的共同体の存在にとって必要な条件として、また同時に、政治生活の理解に必要な基本的な政治的カテゴリーとして、認めさせるまでに至るであろう。<sup>22)</sup>

### 三 付随的考察

国民的現象 (phénomène national) の歴史性を認めるということは、国民の觀念の範囲を制限するし、また幾つかの重要な帰結を含意する。ポランは、それを以下のような三つの論点にまとめている。

まず第一に、一つの積極的帰結は、ほとんど冗語法であるが、しかし言い落すことを避けねばならない。—— 国民的現象の歴史性を認めることは、西欧文明において、また現代文明において、多くの攻撃や多くの祈願にもかかわらずたしかに少しも超出されていない、発展の一段階にある、その価値を小さくすることでも、その存在またはその重要性を見誤ることでもない。ポランの意図は、ここで、諸国民の現代的有効性を表明している諸事実 —— ナショナルな諸戦争、新しい諸国民の形成、国民的少数派によって提起される諸問題の深刻さ —— を



思い起すことではない。<sup>23)</sup> 諸教説の次元にとどめておくために、ポランはたんに、ド・ゴール将軍が諸国民についていただいた次のような観念を思い起させる。――それは諸国民のなかで、一つの人民、一つの歴史、一つの文化、一つの個性を結合しつつ、その各々を「歴史の基本的存在」に認定するのである。「祖国」(La Patrie) は、そのメンバーたちが、かれらの所属する国民についていただく観念である。かれらにとって、それは一つの「別の秩序の現実」、あらゆる犠牲に価する至高の価値、である。それは、もはや存在しないということが起きないように、主権的である。国民主権の保存、維持は、それを保証する統治を正当化する。おそらくそれと知らずに、著しい強調の符合を伴って、ルソーの思想を再び見出しつつ、ド・ゴール将軍は次のように結論する。――人間は「祖国」の中で、そして「祖国」によってしか、真に自分自身でなく、完全に自分の才能や自分の徳を行使しえない。<sup>24)</sup> ルソーはすでに、市民についてこう述べていた。――「(祖国への) 愛は、彼のあらゆる生活をなす。彼は『祖国』しか見ず、『祖国』のためにしか生きない。彼が一人であるや否や、彼は無である。彼がもう『祖国』をもたないや否や、彼はもう存在しない。そして、もし彼が死なないならば、彼はもっと悪い。」<sup>25)</sup>

ポランによれば、こうした態度についてひとがどんな意見を述べようとも、それは、昔からの諸国民においてと同様、新しい国々において、つくられる歴史のなかで、大きな有効性と大きな共鳴をもつことが容易に考えられる。

第二に、そしていわば逆に、諸国民の歴史性の承認は、西欧文明の只中でさえ、われわれの時代に、国民的存在の古典的な与件や要件ともはや一致しない、新しい諸現象の理解を助ける。こうして、ひとは例えば第二次世界大戦の際に、国際的次元で発達し、そして国民的次元で根本的な分裂を引き起す、イデオロギー型の諸々の連帯が現れるのを見た。

ドイツの神聖ローマ帝国のように、諸々の広大な政治的総体が、かつて何らの国民感情もそれらに対応することなしに存続しえた。しかし、それは中世においてであった。ナショナリズムの時代とともに、オーストリア・ハンガリー帝国のような諸多民族国家は、自らのうちに弱さと解体の大きな種をはらんでいるように思われることがあった。それは近代の諸植民地帝国の崩壊を裏付けることができるような感じを与える。しかし、また逆に、ひとは諸々の多民族

的制度の出現に居合わせているのであって、それらは、それらのもろさや不安定さにもかかわらず、それらの単なる永続性によって一つの必要を証言し、国民的枠組みの不十分さを示し、かつその超出の問題を提起している。

ついに、ひとは超国民的な (supra nationales) 諸政治構造が主張され、発展するのを見る。——それらは現行の国民的諸力を尊重するように導かれるだろうか。それらは、それらに見合った新しい表象、新しい国民的自覚を引き起すだろうか。それらは国民的準拠のない諸政治的共同体の構成をもたらすだろうか。諸国民の存在の偶然的な歴史的な性格は、問題を未解決なままにし、そして人々の発明に活躍の余地を残すのを認めている。<sup>26)</sup>

第三に、もしひとが諸国民の存在の歴史的解釈を採用するならば、ひとは国民状態を経る諸政治的共同体の推移を、諸人民の生成における必然的段階とみなすことをあきらめることが確認される。その理由は、まず最初に、諸国民の形成の偶然性が強調されるからである。次に、歴史が示したように、実際、国民は、都市国家または王朝国家の時代と諸帝国の時代との間に、一つの普遍的で必然的な段階を形成しなかったからである。その過程はたんなる拡大の単系的過程でなく、諸文明とともに異なる、性質における変化、変形の過程であるように思われる。

そのときから、ひとは大きな諸植民地帝国の崩壊のなかで、自らを西欧風の諸国家にしようと試みている、西洋でない諸住民 (populations) に生じるであろうことをいふことができるし、また、ひとが少し急いで、それらに「新しい諸国民」の名を与えていないかどうか自問することができる。近代諸国家としての、また諸国民としての、それらの存在を可能にするには、すでに構成された近代諸国家とのそれらの敵対関係だけで十分だろうか、多民族的諸制度へのそれらの参加だけで十分だろうか、また、にわかに (*ex abrupto*) 国民的習俗と国民的自覚を発展させるための、それらのリーダーたちの努力だけで十分だろうか。歴史を通しての、それ以上にさまざまな文明の諸歴史を通しての、かかる短絡は、習俗の深い現実に対して何も変えることなしに、とりわけナショナリズムの最も攻撃的な形態に火をつける危険はないだろうか。ひとは先進諸国民と、国民に変えるには弱い構造をもつ諸々の政治的総体との、反目の急展開を通して、諸々の国民的習俗が形成されることを当てにしようだろうか。そ

れらを現代西欧文明に統合するための、また、それらを西欧の様式で国際的生活に参加させるための、あの努力がおそらく有効的であり、また、おそらく生き生きした諸々の国民的統一を構成するのを可能にするだろう。しかし、かかる努力はたしかに心的外傷を与えるし、またそれが国民的存在から一層隔たった諸構造に行使されるだけにますますそうである。哲学者に提起される問題は、次のようである。—— ひと、外部から、またまったく人工的仕方で、一国民を形成しえ、習俗や国民的生活をもたらしうのだろうか。その反対に、部族的諸構造または地理的、宗教的、民族的、文化的諸連帯から、産業文明の近代的諸形態への参加を可能にする国家的諸制度へ移ることを認める、発展のオリジナルな諸形態を発明しようと試みねばならないのでないだろうか。<sup>27)</sup>

## おわりに

結論としてポランは次のように言う。すなわち、ある何らかの形の文化とある何らかの型の政治的主権が呈する弁証法において一つの政治的共同体が確立されるとき、国民は、文化的なものと政治的なものの諸関係のある何らかの状態を表わしている。国民的存在についての歴史的理論は、そうした弁証法が必然的かつ普遍的に、国民的枠組みを伴うものでないことを認めている。かかる理論はまた、そうした弁証法が国民的存在の多様な形態を伴うことを認めねばならないだろう。それは、最も開かれた仕方で、この点に関してあらゆるフェティシズム（物神崇拜）から解放しつつ、国民的現実を理解しようと努める。

言い換えれば、たんに外面的仕方で、その出来事、その消滅または不在、そのありうる除去において、国民の概念の歴史性を考察するのではなく、また内面的仕方で、諸国民に対して、またそのなされる自覚に対して、認められる性質自体の歴史的進化を検討しつつ、それを考察せねばならないだろう。諸々の政治的共同体は、規模において、また性質において、一層多様であることは決してなかった。それらの準拠する文化的地平は、一層異なっていることは決してなかった。われわれはおそらく国民的現象自体の歴史的変化に居合わせているのである。そして、かかる変化は、国民的現象をして、かつてないほど多様な

諸政治的共同体に基盤として役立つことを可能ならしめるだろう。しかしながら、国際的生活の緊密化と強化は、かかる変化をたえず関係づけてもいる。

存在しようとしていることを予測すること、また危険を冒すことは、政治的人間に属する。哲学者は、残念ながら、完成される事柄についての理論をつくることができるのみである。<sup>28)</sup>

# 注

- 1) Raymond Polin, « L'existence des nations », in *Annales de Philosophie politique*, t. 8, PUF, 1969, p. 37.
- 2) Polin, art. cit., pp. 37–38.
- 3) Polin, art. cit., p. 38.
- 4) Machiavelli, *Il Principe*, 26. 『君主論』第26章（池田廉訳、世界の名著16、中央公論社）参照。
- 5) Louis Servin, *Vindiciae secundum libertatem ecclesiae gallicanae defensio regii status gallorum francorum sub Henrico IV rege Francorum et Navarrae*, 1590. Salvo Mastellone, *La Reggenza di Maria de' Medici*, 1962.
- 6) Jean Bodin, *Les six Livres de la République*, (Scientia Verlag Aalen 1977), liv. I, ch. I, p. 1.
- 7) Hugo Grotius, *De Jure belli ac pacis*, 1625. 『戦争と平和の法』全3巻（一又正雄訳、巖松堂、1950–51年）。
- 8) Samuel Pufendorf, *De Jure naturae et gentium*, 1672. Jean Barbeyrac (tr.), *Le droit de la nature et des gens*, 2 tomes, chez Pierre de Coup, 1734.
- 9) Thomas Hobbes, *Behemoth or The Long Parliament*, with a New Introduction by Stephen Holmes, The University of Chicago Press, 1990.
- 10) Thomas Hobbes, *Leviathan*, II, ch. 17, (ed. Pogson Smith, Oxford). 『リヴァイアサン』(二)、第17章（水田洋訳、岩波文庫、34頁）参照。
- 11) John Locke, *Two Treatises of Government*, I, SS 143–148, (ed. Peter Laslette, Cambridge, 2 ed, 1970). 『全訳 統治論』第一篇、第11章、143–148（伊藤宏之訳、柏書房、137頁以下）参照。
- 12) Polin, art. cit., p. 40.
- 13) Polin, art. cit., pp. 40–41.
- 14) Karl Marx, Friedrich Engels, *Manifest der Kommunistischen Partei*, ch. 2. 『共産党宣言』第二章（大内兵衛・向坂逸朗訳、岩波文庫）参照。
- 15) cf. K. W. Deutsch, *Nationalism and its Alternatives*, 1969. 『ナショナリズムとその将来』（勝村茂・星野昭吉訳、勁草書房）16–18頁参照。
- 16) Polin, art. cit., pp. 41–42.
- 17) J. - J. Rousseau, *Considérations sur le gouvernement de Pologne*, IV, (*Oeuvres complètes*, Pléiade, t. III), p.966.

- 18) Montesquieu, *De l'Esprit des Lois*, liv. XIX, (t. I, éd. R. Derathé, Garnier).  
Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité*, O. C., III, p.169.  
Rousseau, *Du contrat social*, liv. I, ch. 6, O. C., III, pp. 360 – 362.
- 19) Polin, art. cit., pp. 43 – 44.
- 20) Rousseau, *Pologne*, IV, O. C., III, p. 966.
- 21) G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, § 274, & § 279, (ed. Hoffmeister, Felix Meiner Verlag, 1955). 『法の哲学』(藤野渉・赤澤正敏訳、世界の名著35、中央公論社、526頁、及び533頁) 参照。
- 22) Polin, art. cit., p. 44.
- 23) Polin, art. cit., p. 45.
- 24) cf. De Gaulle, *Doctrine politique*, Éditions du Rocher, 1992, p.217. また、嬉野満州雄編著『ドゴールの言葉』、日本国際問題研究所、1964年、201頁参照。
- 25) Rousseau, *Pologne*, IV, O. C., III, p. 966.
- 26) Polin, art. cit., p. 46.
- 27) Polin, art. cit., pp. 46 – 48.
- 28) Polin, art. cit., p. 48.

